

# 今を生きる子どもたち

貧困と格差の拡大のなかで

III

④

公立高校の保健室で数多くの子どもたちの相談にのってきた養護教諭の本間康子さんに聞きました。

◇ 在学中に、あるいは卒業後、「先生、妊娠してみたい。」

どうしよう」と相談してくる女の子たちが大勢います。親になんといえはいいのか、産後、先生、妊娠してみたい。男の子は、私が女性だからどうしよう」と相談してくる少ないのですが、抱えている問題は非常に深刻だったりし

背景に思いはせ



公立高校養護教諭の本間康子さん

## 明日を一緒に考える

ます。切羽詰まった状況のなかで、セックス産業に足を踏み入れる子どももいます。

「高校生のくせに」などといったり、事柄の是非を説いたりしても何も解決しません。子どもたちの行動の表層に目を奪われるのではなく、その背景に思いをはせないと。相談にくる子どもたちの多くが、厳しい家庭環境のなかで寂しさを抱いて日々を生きています。

いっしょにご飯を食べたり、そこに行けばたわいなおしゃべりができたりするような場所があれば、彼女たちが予期せぬ妊娠にみまわれることはなかったかもしれせん。

彼女たちの生い立ちを一緒に受け止めて、明日生きることを一緒に考える。そういう援助が必要です。

子どもたちをみていると、

いわゆる「問題行動」は、おとなのほうに責任がある場合がほとんどではないかと思えます。彼ら、彼女らは親の愛に飢えています。「ひどい親だ」というのは簡単ですが、親にも事情があります。日々の暮らしがぎりぎり、家庭を犠牲にせざるを得ないような働き方を強いられ、自分の子どもにゆっくり向き合うだけのゆとりをもてません。生活にもっと余裕があつてこそ、親自身も変わっていくのでは無いでしょうか。

というスタンスが年々強くなっていきます。一人ひとりのケースについて話し合っているとかかわるな」といわれてしまふ。「こじれたときに大変だから」と。子どもたちの生活の土台である家庭がぐらついているときに、そのぐらつきをみようとしなくて勉強だけを押し付けているのです。うまくいくわけがありません。

学校こそが、子どもたちの困難を打開する糸口をみつければ、必要な援助を具体化する「貧困の防波堤」の役割を果たす必要があります。そのため、1学級の子どもの人数を少なくすること、1人ではなく複数の教員がクラスを担当することはもっとも急がれる施策です。

### 学校が防波堤に

学校では、子どもたちの家庭のことには、かかわらない

学校の先生が、子ども一人ひとりについてよくわかっていうことが大事だと思うので。(おわり)